平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

医療法人あかね会土谷総合病院　舛田隆則

1. 参加した目的と達成度について

近年，放射線技師による海外発表や論文発表が盛んになり，日本の放射線技術のレベルの高さが示されるようになった．私も 2 年連続して RSNA での発表を行うことができた．このような経験から、国内のみならず，海外の最先端の研究テーマならびに研究方法に大変興味を持つようになった．また、臨牀現場における外国の放射線技術のレベルがどの程度なのかを実際に自分の目で確認してみたかった．そのような意味でも、今回の海外研修は絶好の機会であった．

最先端の研究テーマとして，分子イメージングがある．PET だけでなく，光イメージング，SPECT/CT，7TMRI などを用いた複合的な研究がされていた．スタンフォード大学では臨床と研究が完全に分離されていた．実験のための最新の機器が随所に設置されており，一般の病院では経験できない環境に触れることができた．また，スタンフォード大学で研究活動をしている先生や学生と話す機会があり，研究に対する考え方，研究手法等について意見交換することができ非常に刺激を受けた．研修生同士で各々の研究を発表し合い交流できたことも非常に有意義なものであった．

2. アメリカの放射線診療の利点と問題点について

アメリカの放射線診療は，とりわけ CT においては撮影を行う技師，3D 画像を作成する技師，それらを総合的に解析診断する放射線医，と役割が明確に分かれている．その意味では大変効率的なシステムのように見える．臨床現場においては，撮影方法，画像解析について細部にわたってマニュアル化されており検査方法の統一化や精度管理に重きを置いていた．しかし，日本の放射線技師のように患者を装置台に案内し，そこで患者を観察し撮影した上で画像解析を行うことによって，より詳細な患者情報，撮影情報が得られ、これらの情報が 3D 作成や画像解析に活かされてくるのではないかと思われる．

また，CT，MRIなどの画像診断装置ごとの専門資格があり、それらを取得しなければ装置を扱えない．スペシャリストとして認められるためには，必要な専門資格を取得し常にレベルアップの努力が必要である．日本にも同様のシステムが普及すれば，放射線技師のレベルアップやモチベーションの向上に有効であると思われる．

3.　今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすか

今回の研修によって，様々なモダリティについて学ぶことができた．また，他のモダリティを知ることにより研究の幅が広がり，これからの自分自身の研究に活かしていきたい．研修を共にした，たくさんの仲間に会えたことは，自分にとって最大の財産になったことは間違いない．

最後に，このようなすばらしい海外研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会，広島大学木口雅夫団長，スタンフォード大学ならびに GE HealthCare の皆様に深く感謝します．また，海外研修に参加の許可をいただきました医療法人あかね会土谷総合病院の今田直幸主任ならびにスタッフの皆様に感謝いたします．

MR JARED STARMAN Ph.D.と
2009 年 RSNA での再開を約束